

# 出土文獻と上古中國語の音韻について

古 屋 昭 弘

## 1. はじめに

以前、馬王堆帛書などの出土文獻に見える漢字の假借用法についてごく短い文を書いたことがある(古屋 1987)。詩經などの押韻例が韻の部分しか明らかにしてくれず、漢字の諧聲符もその字の音節全體をどの程度まで忠實に表しているのか確實でないのに対し、通假の例はその字が本字と同音あるいは類音であったことが確實であるため生々しい現實感を伴っているということについて具體例を挙げつつ述べた。それからはや十七年、この間の先秦・秦漢の出土文獻の増加は著しいものがあり、正に應接に暇ないほどである。その短文での豫想通り通假例も増える一方である<sup>1)</sup>。また、今まで見られなかった諧聲符を含む形聲文字の増加もありがたい。現在までの上古音研究の結果と良く合致し、頷かされる通假例や諧聲符が多い一方、理解に苦しむような不思議な例も時折見られる。最近の郭店出土や上海博物館蔵の楚簡の場合、特にそうである。それらが本来のものであれば音韻史見直し或いは精密化のための格好の材料となることは疑いない。一例を挙げれば、上海博物館蔵戰國楚竹書(二)(以下「上博簡二」と略稱)では、「聲」の意味で「聖」が使われたり(郭店でも)、「暑」を表わす字に諧聲符として「処」が使われたりしている。これなどは、上古中國語で牙喉音系聲母(後述)を持つと推定される「聲」「処」が、紀元前 300 年頃の楚<sup>2)</sup>において既に舌音系の「聖」「暑」と合流ないし近似していたことを示すものとして貴重である。これらについては別稿に譲り、今回は上古音研究の立場から見て同定に疑問の残る例について考えてみたい。今後の議論の進行上、まず上古音再構の方法を概観しておきたい。

## 2. 上古音再構の方法

上古中國語の音韻再構の基礎となるのは、主に①隋唐の中古音(約 3600 の

音節を「平上去入」計 193 の韻によって配列した隋の『切韻』あるいはそれを増補した北宋の『廣韻』により細かい枠組みが知られる）、②詩經を始めとする先秦の押韻状況、③形聲文字の諧聲符、④漢字の假借用法や經典その他の異文、などであり、これらを資料とした清朝考證學者たちの研究により、上古音の聲母と韻母（特に韻部）の枠組みは、既にかなり詳細に判明していた。20 世紀になり、B.Karlgren が *Grammata Serica* (1940、*Grammata Serica Recensa* は 1957) において、近代言語學の方法を駆使した復元を試み、その後、董同龢『上古音韻表稿』（中央研究院歷史語言研究所、1944、リプリント版あり、たとえば 1991 影印第 4 版）、李方桂『上古音研究』（『清華學報』新 9 卷 1・2 合卷、1971、のち北京商務印書館、1980）、S.A.Starostin の *Rekonstrukcija drevnekitajskoj fonologičeskoj sistemy*（上古漢語の音韻體系再構、Moscow:Nauka、1989）、W.H.Baxter の *A Handbook of Old Chinese Phonology*（上古音便覽、Berlin and New York : Mouton de Gruyter、1992）を代表とする数多くの研究により、その再構はますますその精密度を高めつつある。

## 2.1 上古の聲母

ここではまず、上古で通用できる聲母の範囲について概観しておきたい。中古音の 37 種の聲母<sup>3)</sup>が上古でどのように関連するかについては主に諧聲符と異文の研究により明らかになっている。以下の 4 系列の聲母はそれぞれの系列内において通用されうる。

### 唇音の系列

幫 p 滂 p' 並 b 明 m  
方 芳 防  
祕 密

### 牙喉音の系列

見 k 溪 k' 群 g 疑 ŋ 影 ʔ 曉 x 匣 ɣ 于 ɣ  
哥 可 奇 錡 阿 呵 河  
誇 汙 吁 鄢 于

### 齒音の系列

精 ts 清 ts' 從 dz 心 s 莊 ts 初 ts' 崇 dz 疏 s

精 清 情 姓 精 晴 生

舌音の系列 (AB2 系列あり)

端 t 透 t' 定 d 知 t 徹 t' 澄 d 章 ts 昌 ts' 船 dz 書 s 常 z 邪 z 以 j

A 旦 坦 但 鱸 組 氈 羶 澶

B 稌 塗 除 除 徐 余

以上 4 系列以外の聲母間の交流の場合も、それぞれ一定の通用條件を備えていることが多く、決して無秩序ではない。例えば：

牙喉音の系列と舌音 章 ts の系列の間 (技：支)

牙喉音の系列と舌音の系列との間 (合：答)

泥 娘 n と 日 n の間 (囊：讓)

透 t' 徹 t' と 來 l 泥 n の間 (寵：龍、灘：難)

書 s と 來 l 泥 n などの間 (恕：奴、身：仁)

來 l と 唇音聲母や牙喉音聲母との間 (鸞：變、落：各)

曉 x と 鼻音聲母や來 l との間 (荒：亡、漢：難)

心 s と 各種聲母との間 (裏：囊、秀：透、修：條) 等など

## 2.2 上古の韻部

ここでは、中古音の支脂之三韻に屬する字を例として、上古の韻部構築の方法を見ておきたい<sup>4)</sup>。諸聲符と先秦の押韻を見てゆくと、上古においては、①中古音の脂韻 (毗耆祁尸資伊姊死鼻祕至など) が齊韻・質韻・屑韻などと関連、②之韻 (怡疑緇寺思己已里試意など) が哈韻・皆韻・灰韻・尤韻・侯韻・職韻・德韻・屋韻等 (僅かに脂韻も) と関連、更に支韻が、③中古歌韻・戈韻・麻韻などと関連する支韻 A (移奇宜差施皮爲跪義戲睡など) と、④中古佳韻・齊韻・錫韻・昔韻などと関連する支韻 B (支岐脾知斯規是紫易避縊など) に截然と分かれることがわかる。そのような上古の分布に基づき、「部」という新たな韻の枠組みが想定され、たとえば①のような韻の集まりは「脂部」、②は「之部」、③は「歌部」、④は「支部」と、それぞれ名づけられている。幾つか例を挙げれば、以下のようである。

①上古脂部（入聲類すなわち入類を特に質部と呼ぶこともあり）

中古脂韻      毗蒼鼻祕至

齊韻      陞稽算

質韻      蜜室

屑韻      埵

詩經の押韻：脂部    相鼠有體    人而無禮    人而無禮    胡不遄死（邶風・相鼠）

（中古）齊<sub>上</sub>      齊<sub>上</sub>      齊<sub>上</sub>      脂<sub>上</sub>

脂部    鶴鳴于埵    婦歎于室    灑掃穹窒    我征聿至（幽風・東山）

屑      質      質      脂<sub>去</sub>

②上古之部（入類は職部とも）

中古之韻      怡疑緇寺思己里試意

咍韻      胎    才待腮改    代

皆韻      豺    崽    埋    噫

灰韻      賄梅媒

侯韻      母

尤韻      有    謀

職韻      疑      式億域

德韻      特      忒    惑

屋韻      囿

詩經の押韻：之部    …左右采之…琴瑟友之（周南・關雎）

（中古）咍<sub>上</sub>      尤<sub>上</sub>

之部    …不知其期    曷至哉    雞棲于埵…羊牛下來…如之何勿思

之      咍      之      咍      之

（王風・君子于役）

之部    …于彼牧矣…謂我來矣…謂之載矣…維其棘矣（小雅・出車）

屋      咍      咍<sub>上</sub>      職

③上古歌部（入類は祭月部とも）

中古支韻 A      移奇差施皮爲義睡

歌戈韻      多可蹉他波譌我唾

麻韻

嗟也

詩經の押韻：歌部 …在彼中河…實維我儀 之死矢靡它（鄘風・柏舟）

（中古）歌 支 A 歌

歌部 東門之池 可以漚麻…可與晤歌（陳風・東門之池）

支 A 麻 歌

④上古支部（入類は錫部とも）<sup>5)</sup>

中古支韻 B 脾是紫易避縊

佳韻 脾 柴 隘

齊韻 脾提 薛

錫韻 錫壁

昔韻 蜎壁益

詩經の押韻：支部 …如壘如篴 如璋如圭 如取如攜（大雅・板）

（中古）支 B 齊 齊

同様の方法により構築される上古の韻部の大枠を示せば、以下のようなのである。

陰類：魚部 支部 之部 侯部 宵部 幽部 歌部 脂部 微部

入類：鐸部 錫部 職部 屋部 藥部 覺部 祭月部 質部 物部 葉部 緝部

ak ek ək awk ewk əwk at et ət ap əp

陽類：陽部 耕部 蒸部 東部 中部 元部 眞部 文部 談部 侵部

それぞれの縦の関係、すなわち之部と職部のような所謂「陰類」と「入類」は、諧聲符や押韻のうえでしばしば関連し、更に「陽類」蒸部も関連することがある。縦の三類（または二類）の主母音と韻尾に何らかの共通性があつたと推定される所以である（上では入類各部にのみ頼 1957 に基づく主母音と韻尾の再構音を附してある）。三者が関係する例を挙げれば以下のようなのである。

之部：待タイ 侯部：構コウ 支部：卑ヒ

職部：特トク 屋部：斟カク 錫部：紳ヘキ

蒸部：等トウ 東部：講カウ 耕部：鞞ヘイ

注意すべきは、中古音の細かい枠組みの中で同音だった字も上古では異なる

部に属することもありうるという点である。たとえば、幽部の「九」と之部の「久」、幽部の「聊」と宵部の「遼」、歌部の「加」と魚部の「家」、侯部の「符」と魚部の「扶」、宵部の「激」と支部の「擊」、鐸部の「亦」と錫部の「易」、眞部の「堅」と元部の「肩」、支部の「雞」と脂部の「稽」などは、上古ではそれぞれお互いに全くの別音であり、隋唐に至る過程で同音化したものである。小川 1960 が「他に證據がない限り、中古において同音である字は、すべて上古においても同音だった」と假定したのは千慮の一失というべきであろう。

なお、上古の聲調の問題については平山 1986、および松浦 2003（原載 1975）とその解題を参照されたい。

### 3. 出土文獻と上古音研究

上古音の枠組みを概観したところで、出土文獻を見直してみると、たとえば郭店楚簡では「謀」（中古尤韻）を〔母+心〕と表記（上博簡一も）、また「牧」（中古屋韻）を意味する字に諧聲符「墨」（中古德韻）を使用、また上博簡二「容成氏」では「牧野」の「牧」に当たる字に諧聲符「母」（中古侯韻上聲）を使用している<sup>6)</sup>。また睡虎地秦簡では「謀」の意味で「牧」が使われている。これら「牧」「謀」「墨」「母」のすべてが、聲母の面では唇音系列の枠内（この場合は明母）に、そして韻母の面でも上述「之部」の枠内に収まっている。また馬王堆五十二病方では「食」（中古職韻）「在」（中古哈韻上聲）「止」（中古之韻上聲）「德」（中古德韻）が韻を踏む箇所（p53）があるが、この4字もすべて上述「之部」の範囲内にある。本稿「はじめに」で、現在までの上古音研究の結果と良く合致し、韻かされる例が多いと言ったのはこのような状況を指すものである。

#### 3.1 陰類・入類・陽類

陰・入・陽三類の関連について、出土地点あるいは当該文獻が寫定された地域により一定の傾向が見られることも興味深い。

たとえば楚簡や馬王堆帛書では陽類と入類の交流が多く見られる<sup>7)</sup>。

郭店老子はか：然(熱)/元部・山開三平仙日（月部・山開三入薛日）p118

etc.

馬王堆老子乙：蓮(裂)/元部・山開四平先來（月部・山開三入薛來）p37

馬王堆經法：連(烈)/元部・山開三平仙來（月部・山開三入薛來）p92

乏(犯)/葉部・咸開三入乏竝（談部・咸開三上范竝）p61

馬王堆周易：眞(咍)/眞部・臻開三平眞章（質部・山開四入屑定）張 p81

寧(楊)/耕部・梗開四平青泥（錫部・梗開四入錫透）張 p94

容(欲)/東部・通合三平鍾以（屋部・通合三入燭以）張 p214

張家山引書：堂落(螳螂)/鐸部・宕開一入鐸來（陽部・宕開一平唐來）  
p163

以下は同じく入類と陽類の交流ながら、入類字が中古で去聲になるもの。

郭店老子：束(靜)/錫部・止開三去寘清（耕部・梗開三上靜從）p112

馬王堆戰國縱衡家書：恣(擯)/質部・止開三 b 去至幫（眞部・臻開三 a 去  
震幫）p85

陰類と陽類の交流もある。

上博簡二「容成氏」：樟(混)/微部・止三合上尾于（文部・臻一合上混匣）  
季 p103

これに對して山東の銀雀山出土の竹簡では陽類と入類の交流はほぼ見られず、  
陰類と入類の交流が見られるのみである。

晏子：組(作)/魚部・遇合一上姥精（鐸部・宕開一入鐸精）p53

汙(蝮)/魚部・遇合一去暮影（鐸部・宕合一入鐸影）p63

守法：柏(霸)/鐸部・梗開二入陌幫（魚鐸部・假開二去禡幫）p30

樹(屬)/侯部・遇合三去遇常（屋部・通合三入燭常）p93

論政：折(制)/月部・山開三入薛章常（祭部・蟹開三去祭章）p81

陰類と入類の交流は楚簡でも見られるが、陰類といってもほぼ入聲に縁の深い去聲に限られる。

郭店老子：豆(屬)/侯部・流開一去候定（屋部・通合三入燭常）p111

折(制)/月部・山開三入薛章常（祭部・蟹開三去祭章）p112etc.

備(服)/之部・止開三 b 去至竝（職部・通合三入屋竝）p118etc.

張家山引書：汙(蝮)/魚部・遇合一去暮影（鐸部・宕合一入鐸影）p98

### 3.2 問題點

出土文獻といえは短期間に釋文と注釋をつけた影印本が刊行されることにはいつも感服させられる。釋文作成に當たり上古音研究の成果が生かされていない例が僅かながら見られるのはやむを得ないところであろう。以下、最近の釋文や研究の中からそのような例を擧げてみたい。

### 3.3 聲母

韻部が同じでも聲母が異なれば、上述した一定の條件を備えていない限り、通用できないのが普通である。以下のような通假字（或いは異體字）の認定はその點で疑問が残ると言わざるを得ない。

- ①望山楚簡：絕(絜)/月部・山合三入薛從(月部・山開四入屑見) 程 2003、p86

「同屬牙音月部」とあるが、「絕」は齒音從母なので認定自體に問題あり。

- ②幽公盨：鄉民(相民)/陽部・宕開三平陽曉(陽部・宕開三平陽心) 馮 2003、p63

連 2003 (p51) の言うとおりに「享」(宕開三上養曉)の通假と見るべきであろう。

- ③郭店「賞刑」：征欽(征侵)/侵部・深開三平侵溪(侵部・深開三平侵清) 李零 2002a、p141

文脈がはっきりしない箇所であるが、「征伐」の意味だとすれば「征戡」(侵部溪母)の可能性もあろう。

- ④上博簡二「容成氏」：競州(青州)/陽部・梗開三去映群(耕部・梗開四平青清) 季 2003、p127

釋文 p269 の注では「營州」の可能性も指摘。「營」は耕部合口。(地理的には合わないが)「梁州」(陽部來母)の可能性もないわけではない。

- ⑤上博簡二「容成氏」進(近)/眞部・臻開三去震精(文部・臻開三上隱群) 釋文 p264

季 2003 では「逮(近)」とする (p151)。いずれにせよ難解。

- ⑥上博簡二「容成氏」𠂔(錢)/元部・山開四平先見(元部・山開三平仙從) 季 2003、p126

釋文 p260 では「主」が二つ横並びした字形と隸定したうえ「𠂔」と解釋。

本稿 3.1 で言及した傾向によれば、同じ農具でも「錢」ではなく「鍤」(元



部見母、「鎌」の意)ではなかろうか。

以上は牙喉音(見組)の系列と齒音(精組)の系列との通用例<sup>8)</sup>。

- ⑦上博簡二「容成氏」：有吳(有無)/魚部・遇合一平模疑(魚部・遇合三平虞明) 季 2003、p104

疑母と明母の通用は不可解と言うほかない。

- ⑧郭店唐虞之道：完物(萬物)/元部・山合一平桓匣(元部・山合三去願明) 釋文 p158

裘錫圭氏の考證どおり「完」ではなく「𠂔」(元部明母)の異體字すなわち「萬」の通假字であろう。上博簡一「孔子詩論」に見える「賓」(p39)の上部が正にこの形である。

- ⑨楚帛書創世篇：[𠂔+步](度)/魚部・遇合一去暮竝(鐸部・遇合一去暮定) 董 2002

この字の「步」については「兆」と見る説が有力である。

### 3.4 韻部とくに開口と合口

同聲母・同韻部でも介音-uを含む字(合口字)と含まない字(開口字)の間では通假の関係が成り立たないのが原則。中古模韻の「姑」と「孤」のように、中古では全くの同音字でも上古では開合が異なる場合があるので要注意(「姑」は開口、「孤」は合口あるいは聲母が $k^w-$ )。

- ①郭店「尊德義」：濩(去)/鐸部合口・宕一合入鐸匣(魚部開口・遇三合去御溪) 李零 2002a、p141

李氏は「去是溪母魚部字、濩是匣母鐸部字、讀音相近」と言うが、もともとこの字は「濩」ではないようである。むしろ「津」の異體字か。

- ②上博簡一「孔子詩論」：紳(堦)/眞部・臻三開平眞書(文部・山三合平元曉) 釋文 p127

「其の歌が」に続く語なので「伸」(のびやかな)と見れば良いのではないか(黄 2002p23に考證あり)。

- ③上博簡二「魯邦大旱」：或(何)/職部・曾一合入德匣(歌部・果一開平歌匣) 釋文 p208

何 2003 の考證どおり「或」は「又」(之部合口)の通假字であろう。

- ④楚帛書創世篇：華胥(姑蘇)/魚部合口・假二合平麻匣（魚部開口・遇一合平模見） 董 2002

「姑蘇」を「姑胥」と呼ぶこともあるとはいえ、「華」と「姑」の通用には無理であろう。

- ⑤王家臺秦簡歸藏：闕(決)/祭部・蟹三開去祭見（月部・山四合入屑見）王 2003、p80

王氏は「上古音闕決俱月部見紐、二字雙聲迭韻、或可通用」と言うが疑問。

#### 4. おわりに

本稿では、出土文獻解讀、特に通假字や異體字の認定における上古音研究参照の必要性、更にその際の原則について考えてみた。たとえば、郭店「窮達以時」に見える「𠂔」プラス「旦」の字について、意味の面からすぐに「轉」（李零 2002a、p89）の異體字と認定する前に、「旦」が開口字、「轉」が合口字であることに注目し、一旦立ち止まってみることが必要なのではないか。そうすることによって、陳偉 2003 の考證のように、「遭」（山開三平仙知）という語に辿り着くことができるかもしれないのである（『楚辭・離騷』王逸註「遭、轉也、楚人名轉曰遭」）。また、上博簡二「容成氏」の「槿」（文部見母）も、「殷の紂王が毎晩酒に溺れて以爲槿」という文脈から考えて、「淫」（侵部以母）の通假字と見るのがふさわしいとはいえ、聲母・韻部両面から見て無理がある。文部曉母の「忻」である可能性が高いのではなかろうか。

反対に、どうしても現時點の上古音研究の結果に合わない例が出てきた場合、その結果自體の見直しを迫られることもありえよう。上古の方言の問題もある（藤堂 1954）。いずれにせよ、今後も増え続けるであろう出土文獻から、一時たりとも目を離すわけにはいかないのである。

#### 〈注〉

- 1) 出土文獻の通假字については、周祖謨 1984、李玉 1994、趙立偉 2002、吳辛丑 2002 を始め、劉寶俊、張傳曾、張儒、趙誠など多くの研究者による論著があるほか、優れた字典として王輝 1993『古文字通假釋例』（藝文印書館）がある。餘談ながら、通假字の議論において、省文とも見做せる例は別扱いすべきだと思われる。たとえば「員（損）」のような例において、ただちに于母・心母通用の例とし

て統計に算入するような論著が間々見られるが、如何なものか。

- 2) 郭店出土や上海博物館蔵の楚簡の年代についてはいろいろ議論があるが、今はとりあえず紀元前 300 年頃、楚の地で寫定されたものと見ておく。
- 3) 中古音の再構音は三根谷徹『越南漢字音の研究』(東洋文庫、1972) による。ただし最近では常母と船母の音價を入れ替える研究者が多い。なお三根谷説では泥母と娘母および匣母と于母は同一音素と考えられている。なお上古音で幫・滂・並の 3 母と明母の交流はそれほど多くない。
- 4) この 3 韻の區別が清朝の戴震や段玉裁の頃、大きな課題となっており、上古における入聲との關連が 3 韻區別の手がかりとなったのであった。たとえば支韻の「避ヒ」「易イ」(参考のために日本漢字音を併記)が諸聲符のうえて入聲錫韻「壁ヘキ」「易エキ」と關連、脂韻「祕ヒ」「醴イ」が入聲質韻「必ヒツ」「壹イツ」と關連、之韻「意イ」「異イ」が入聲職韻「憶オク」「翼ヨク」と關連、というように、3 韻と關連する入聲には一定の對應關係がある。更に日本の吳音で、支韻には「施餓鬼」「是非」「戲作」の如くエ段が現れ、脂韻には「阿鼻叫喚」「美濃」「刀自」の如く原則としてイ段、之韻には「圍碁」、「一期一會」、「自己」、「止利佛師」の如くオ段が現れることも、B.Karlgren 以來の再構に一役買っている。
- 5) 歌部に屬していた支韻 A と支部に屬していた支韻 B が、どのように、またいつごろ中古音の支韻として合流して行ったのかという問題がある。前漢の文學作品の押韻狀況によれば、司馬相如・揚雄といった四川出身の知識人の詩賦においていち早く二者の合流が伺われるのは興味深い。また、推古朝漢字音などで支韻 A (もと歌部) 所屬の字が、有麻移刀(ウマヤド)、巷奇・巷宜(ソガ)、牟義都(ムゲツ)のようにア段とエ段で、支韻 B (もと支部) 所屬の字が、獲加多支鹵(ワカタケル、稻荷山古墳)、斯歸斯麻(シキシマ)のようにエ段とイ段で現れることも、合流過程を垣間見せるものとして貴重である。
- 6) 印刷の都合上、本稿で扱う出土文献の字體・字形は各文献の釋文部分に準據せざるをえなかったが、影印部分を参照しうる資料の場合は、できるだけ本來の字體・字形も確認するようにした。
- 7) 以下、通假字のあとの括弧内は本字(と推定されるもの)。スラッシュのあとは各字の音韻情報、たとえば「元部・山開三平仙日」は上古元部、中古山攝開口三等平聲仙韻日母のこと。以下同様。
- 8) 詩經などの「日就月將」の句が、上博簡二「民之父母」で「日逮月相」(釋文 p171) で現れるからといって、すぐに「逮」(幽部・群母) = 「就」(幽部・從母) と見做せるかどうかは疑問である。字音と直接の關係を持たない異文という場合もありうるからである。ただし普通の通假の場合との見極めは確かに困難であり、方法論的な議論の深まりが期待される。なお⑤の「進」は嚴密に言えば「逮」に近い字體。

#### 〈參考文獻〉

陳偉 2003『郭店竹書別釋』湖北教育出版社

程燕 2003「望山楚簡考釋六則」『江漢考古』2003 年第 3 期

董楚平 2002「楚帛書創世篇釋文釋義」『古文字研究』24

- 馮時 2003 「幽公盨銘文考釋」『考古』2003 年第 5 期（〔幽〕嚴密には別字體）  
古屋昭弘 1987 「漢字の假借用法について」『出版ダイジェスト』1245  
何琳儀 2003 「滬簡二冊選釋」<http://www.bamboosilk.org> 簡帛研究網 03/01/14  
平山久雄 1986 「上古漢語の聲調調値」『伊藤漱平教授退官記念中國學論集』  
黃人二 2002 『上海博物館藏戰國楚竹書（一）研究』高文出版社  
季旭昇主編 2003 『上海博物館藏戰國楚竹書（二）讀本』萬卷樓  
荊門博物館編 1998 『郭店楚墓竹簡』文物出版社  
高大倫 1995 『張家山漢簡《引書》研究』巴蜀書社  
李零 2002a 『郭店楚簡校讀記』北京大學出版社  
李零 2002b 「上海楚簡校讀記（之二）：緇衣」（『上博館藏戰國楚竹書研究』上海書店出版社）  
李玉 1994 『秦漢簡牘帛書音韻研究』當代中國出版社  
連劭名 2003 「幽公盨銘文考述」『中國歷史文物』2003 年第 4 期（〔幽〕嚴密には別字體）  
馬承源主編 2001 『上海博物館藏戰國楚竹書（一）』上海古籍出版社  
馬承源主編 2002 『上海博物館藏戰國楚竹書（二）』上海古籍出版社  
松浦友久 2003 「聲調の史的變化に關する基礎的な論點」（『中國詩文の言語學』研文出版）  
馬王堆漢墓帛書整理小組編 1976 『老子』文物出版社  
馬王堆漢墓帛書整理小組編 1976 『經法』文物出版社  
馬王堆漢墓帛書整理小組編 1976 『戰國縱衡家書』文物出版社  
馬王堆漢墓帛書整理小組編 1979 『五十二病方』文物出版社  
小川環樹 1960 「詩經異文の音韻的特質」『橋本博士古稀記念東洋學論叢』  
彭浩 2000 『郭店楚簡《老子》校讀』湖北人民出版社  
賴惟勤 1957 「上古中國語の韻母に關する二三の問題」（『東洋學報』40-1）  
藤堂明保 1954 「上古漢語の方言—特に周秦方言の特色について—」『東方學論集』  
王輝 2003 「王家臺秦簡歸藏校釋」『江漢考古』2003 年第 1 期  
吳九龍 1985 『銀雀山漢簡釋文』文物出版社  
吳辛丑 2002 『簡帛典籍異文研究』中山大學出版社  
趙立偉 2002 「睡虎地秦墓竹簡通假字研究」『簡帛語言文字研究』第一輯  
張立文 1991 『周易帛書今注今釋』學生書局  
周祖謨 1984 「漢代竹書與帛書中的通假字與古音的考訂」『音韻學研究』1

#### 後記

本稿は 2003 年 12 月 2 日開催の早稻田大學 21 世紀 COE プログラム・アジア地域文化エンハンシングセンター第 9 回定例研究會で發表した内容（「上古中國語の韻母について」）を元に加筆したもの。當日ご意見を賜った出席者諸氏に心より感謝申し上げます。